

『新世紀エヴァンゲリオン』と Material children

多田伊織

一 「事件」としての『新世紀エヴァンゲリオン』

一九八〇年代、首都圏の子供達の間では次のような口碑があったとき。「世直しだ、世直しだ、孫子の代にもう一度」。関東大震災の再来を願うような不気味さが漂う。

そして、一九九五年。一月、阪神淡路大震災。三月、オウム真理教による首都圏における一連のサリンや毒ガスを使用した無差別テロ。瓦礫と化した阪神淡路地域の姿をテレビ画面から追いついてたのが、一連のオウム真理教の事件である。オウム真理教が唱えていた「ハルマゲドン」という言葉が、テレビを通じて一般に認知された。陰鬱な一年だった。「戦後五十年」の節目の歳は、災厄と人間の悪意に翻弄された。

この年の十月、のちに大ブレイクすることになる『新世紀エヴァンゲリオン』の放映が開始される。テレビ東京系というマイナーな

ネット、制作はオタクの巣窟ガイナックス、監督はオタクの権化庵野秀明。いやがうえにも、オタクたちのオタク心をそそるお膳立てではあった。ネットされない地方では、アニメファンは飢餓感を煽られた。

巨大ロボットに乗って人類の敵と戦う少年少女の物語は、しかし、従来のロボットアニメとは一線を画したものだ。息苦しい展開、正体不明の敵、そして何より特筆されるのは、主人公達の動機が希薄なことだ。彼らは確たる理由や信念で戦うのではない。「愛」でも「勇気」でも「友情」のためでもない。そうした、倫理的道德的な言葉は一切触れられもせず、語られもしない。人類の敵と戦う戦士となった少年少女達は、エヴァンゲリオンという名の巨大な兵器に乗り込むことで、存在理由を与えられているように見える。

この物語の監督庵野秀明は、「福音の物語をつくる」と語った。しかし、なにが「福音」なのか。全二十六話、半年にわたったこの

物語はそれを示さずに終わった。すでにあちこちで語られ過ぎていくように、この物語は、テレビ放映時、未完のまま終わっている。

当初の構想を実現できぬまま、制作日程の見通しの甘さによって、最終二話はそれまでの物語の筋とは断ち切られた形で作られている。よくよくみれば、第十六話「死に至る病、そして」を敷衍した形で、主人公シンジの内面を語る、という手法をとっているのではあるが。

こうして数々の謎と筋立てとをぶち切る形で、よくいわれるのは「広げるだけ広げた風呂敷を畳み損なって」、テレビ放映を終えた『新世紀エヴァンゲリオン』は、未完ゆえに、カルト的な人気を高めて行く。その人気を高めたはじめは、テレビ放映時からの視聴者によるものである。

『新世紀エヴァンゲリオン』がどのように人気を獲得していったかを示す一つの典型が、私個人の例だろう。

私は、二月から三月までの最終六話を見た。

放映開始直後、新聞のテレビ欄に「エヴァンゲリオン」の文字を見て、直感的に「これは、はまりそうだから避けたい」と思った。

福音を示す「エヴァンゲリオン」からとったとおぼしい「エヴァンゲリオン」の語は、オタクの嗅覚をくすぐる独特の匂いを放っているからだ。すでに私は『宇宙戦艦ヤマト』で学習している。ある限定された「よきもの」を指摘すアニメは、かならずカルト的な熱狂を産む。本放送のときには見向きもされないが、再放送を重ねて人

気は動かぬものとなり、劇場版が作られ、ファンが行列をつくる。これが、『宇宙戦艦ヤマト』以降続いたアニメの議定書なのだ。そして、『新世紀エヴァンゲリオン』というタイトルは、その独特の匂いで、過去にアニメに熱中した人、あるいはいま愛好している人がめがけ、こっちへこいと合図を送っている。

とうとう避けきれず番組を見始めた私の予感的中した。三月二十七日の放送終了までは、番組のある水曜午後六時半から七時までの間を中心に一週間が廻った。見損ねた分を取り戻すために、第一回からビデオに録画している友人からすべて借り、ダビングし、繰り返し見た。『エヴァンゲリオン』をみるためには、ビデオは必須だ。『エヴァンゲリオン』は、従来のテレビアニメとはまったく異なった作り方をされているからである。

これまで、テレビで放映されるアニメーション作品は、受け手がリアルタイムで知覚できる情報によって成立する約束であった。つまりは、一瞬で見逃してしまうような短いコマの情報は、作り手側（多くは現場のアニメーターの暴走なのだ）の遊びでこそあれ、そのことが物語の筋立てを左右することはほとんどなかったと言っている。オウム事件で問題となった、麻原の肖像の挿入などはそのひとつだ。これは、アニメーターと熱心なアニメファンの間の密かな楽しみでしかなかった。アニメーターはこっそりを画像を潜ませ、ファンはそれをコマ送りして暴く。どれほど速く見つけるかが、こ

の宝探しの楽しみであり、ファン同志が競い合うたわいのないお遊びだった。

ところが、『エヴァンゲリオン』は明らかに違う。『エヴァンゲリオン』は「読むように見る」アニメなのである。一話はおよそ二十五分、A B二つのパートからなる。この一話を解読するには、最低でおよそ三倍以上の時間がかかる。

リアルタイムで『エヴァンゲリオン』を見ていたファンの多くは、まず、本放送を見ながらビデオに録画し、次に録画をもう一度見、気になるところを何回も繰り返しコマ送りすることで、そこに含まれている謎を拾っていった。そうしなければ、『エヴァンゲリオン』の全体像がわかりにくいように、仕組みまれていたからである。活字やマンガなら、理解できるまで繰り返し読むのは容易だ。映像で同じ事を行うには、ビデオが必要だった。

従来のアニメと決定的に違い、『エヴァンゲリオン』には、背景説明をするためのせりふやシチュエーションはない。子供向けを言い訳に、概ね、アニメでは、本筋と関係なく、物語の背景や兵器やロボットなどの設定を説明する場面がある。しかし、『エヴァンゲリオン』はそれをせず、すべての設定を物語の中に埋め込んだのである。

謎や伏線は思わぬ所に隠れている。アニメーションは通常一秒24コマかつ3コマを一単位として動かす8コマ撮りで撮影される。

『エヴァンゲリオン』では、たった八分の一秒の画面や、せりふの一言が謎を解く鍵となるものが少なくない。問題の部分をあぶりだし、その都度ビデオを止めては中の情報をかき集め、全体の流れをつかむ、というのが放映日のファンの行事であった。

筋立てが込み入っているうえに、術学的に、聖書やカバラ、死海文書や伝承、ユング心理学等を引用しており、謎解きは一人では無理だ。大学生協やアニメ専門コーナーには「死海文書」関係の書籍が並んで飛ぶように売れ、聖書が読まれた。電話を掛ける相手がいれば電話し、翌日学校に行けば友人と話し合う。一番盛り上がりつつあるのは、インターネットやパソコン通信上であろう。私の参加しているパソコン通信では、放映日には、八時頃から、その日の内容について書き込みが始まる。仕事で留守番録画をまだ見ていないファンに、ネタばらしをしない用心のためだ。それがほぼ一日半続き、その回の謎や気にかかる部分を出し切ったところで、『エヴァンゲリオン』の目指しているらしい方向や新たな問題が見えはじめる。こんどは、別な場所での書き込みや情報を引用しさらに議論を進め、次の放映日を迎えるというサイクルを繰り返していた。私の参加するパソコン通信は、三十代が中心だ。高校くらいまではアニメを見ていたが、その後は縁が薄くなった人が、『エヴァンゲリオン』によって再びアニメに帰ってきた、というのが多い。もちろん、三十代には、アニメやマンガを卒業することなく、ずっと見続けて

きたコアなオタクも含まれている。

コアなオタクを別にしても、『エヴァンゲリオン』の求心力には恐ろしいものがあつた。皆がテレビの前で、登場人物に「シンクロ」し、心を痛め、未来への希望を夢見た。単なる謎解きが関心をつないだのではないのだ。不安定な家庭に育ち、人とのコミュニケーションが不得手な登場人物たち。誰もが心に深い傷を負い、それを癒しきれないでいる。彼らが救われれば、すくなくとも運命を全うすれば私も救われるのだ、という思いがファンの中にはあつた。最終二話は、そうした願望を拒絶するために作られたと、私は考えている。

三月二十七日七時、私はテレビの前にへたりこんだ。憑き物が落ちたような感じだった。まさに、二ヶ月間、私は『エヴァンゲリオン』に憑かれていたのである。それはほとんどのファンがそうであつたろう。そのとき私は、制作スタッフも同じであつたろうと思いついた。制作半ばから精神の平衡を欠いたと、庵野監督は放映終了直後自ら告白している。そのあと何カ月か、私にもエヴァファンの友人たちにも空虚さが残つた。

もし、テレビ放映が本筋に沿って続けば、結末は新しい神を作るか、今の世界を破壊するかのどちらかを選択せざるを得ない。制作時間がないことに加えて、次善の策としてとられがちな超越的な価値への投企を避けるために、庵野監督がとつたのは、無残で身も蓋

もない稚拙な心理劇をすることだった。無邪気なファンの期待に、もし、あのとき、庵野秀明監督が応えていたとしたら、彼は「教祖」とならざるを得なかつた。しかし、庵野監督はそれをしなかつた。他人に意を払う余裕はなかつた。「教祖」には、教義を説いた責任も生ずる。どうしようもないほどにふくれあがつたファンの願いを「悪魔祓い」するために、テレビ版の最終二話はあつた。^①

最終二話をめぐって、極端な賛否両論がネットを中心にわき起こつた。憑依され、肩入れしていたそれまでの自分にどう始末をつけるかが、賛否の根底にあつた。「素晴らしい」と手放して褒めるものは、それまでの自分を否定して傷つくことを恐れていた。「冗談じゃない」と罵詈雑言を投げつけるものは、こんなつまらないアニメに熱中していたそれまでの自分に傷つき、期待を裏切られたことを恨んでいた。どちらの立場も、三月二十七日まで『エヴァンゲリオン』依存がいかに蔓延していたかを雄弁に語っていた。

LD版『新世紀エヴァンゲリオン』は、すでに何枚か発売されはじめていたところだった。テレビ放映は受け手にとっては無料だが、LD購入者は対価を払っている。放映では未完でも、LDは完成させる義務がある。放映後ほどなく、ガイナックスから正式なアナウンスがあつた。二十五話二十六話を当初の形で作りなおし、LDとして提供する、また、制作日数の関係で手抜きとなつた十九話以降については、新たなセルをかきなおしてリメイクすると。そのうち、

完結編を劇場映画にすることが決まり、番組終了から一年後の九七年三月、二十四話までの総集編に本来の最終一話を加えて、劇場版『新世紀エヴァンゲリオン シト再生』が上映される運びとなった。今度こそ、完結するはずだった。

しかし、期待は再びはぐらかされる。初日にあと一カ月と迫った二月、庵野監督がお詫びの会見をする。「構想が膨らみすぎて、与えられた時間内に収まらない。ここでは、二十四までの総集編 Death は完成、これに二十五話の一部をあわせて公開し、真の完結編 Rebirth 夏に上映する。」と。

エヴァンゲリオンブームは、春の上映でピークを迎えた。公開前に放映された『エヴァンゲリオン』の再放送や劇場版が引き金となり、新たなファンを開拓した。「自分のことしか考えないエヴァ世代」などと揶揄されたのは、この時期のことである。

今年の夏、ようやく作品としての『新世紀エヴァンゲリオン』は完成し、物語は終わりを告げた。しかし、それは平穩に終わったのではなかった。エヴァンゲリオンブームによって、さんざんに引用され、参照され、言及され、予想された作品を、なんとしても他人の先走りを裏切る形で終わらせたかったようだ。それは、庵野秀明監督の資質にも起因するが、生まれてからテレビのあった世代特有のやり口でもある。それを産んだのは、戦後の社会で戯画としてしか引用されなかったキリスト教なのである。

それを論ずる前に、キリスト教的要素を意図的に混ぜこんで作り上げられた『新世紀エヴァンゲリオン』の全体を眺めることは無駄ではないだろう。

一 『新世紀エヴァンゲリオン』という物語

『新世紀エヴァンゲリオン』は、表向きには終末と再生の物語である。

二〇〇〇年九月十三日。南極に、光の巨人が出現 [Fig. 1]、原因不明の大爆発を引き起こした。この衝撃で地軸は傾きを失い地球は四季をなくし、南極の氷が融解し世界中で水位は十数メートルも上昇、南極は死の世界となり、人類の半分が死滅、多くの国土が水没した。後世これを「セカンドインパクト」と称する。しかし、真相は明らかにされず、公式には大質量隕石の衝突によるものと説明された。『新世紀エヴァンゲリオン』はその十五年後、二〇一五年、人類に災厄をもたらす謎の巨大な敵「使徒（英語では Angel）」が飛来することから始まる。南極の光の巨人はのちに第一使徒アダムであったことが明らかにされる。

第三の使徒サキエルが襲ったのは、国連の特務機関ネルフのある箱根（物語世界では「第三新東京市」と改称）であった。主人公碇シンジ [Fig. 2] は、何もわからぬままに、ネルフの総司令である父碇ゲンドウに呼び出され、巨大ロボットである汎用人型決戦兵器

「人造人間エヴァンゲリオン（以下エヴァ）」初号機に乗り込む。使徒は初号機の暴走によって殲滅されるが、シンジには実感が無い。自閉的な少年は、同じく選ばれた少女たちとエヴァに乗り、使徒殲滅の戦いを繰り返しながら、心の問題をあらわにしていく。エヴァと第三新東京市の使徒迎撃機能の維持には、セカンドインパクト後の貧しい国一つを傾けるほどの莫大な資金が、国連の人類補完委員会の指令の元にそそぎ込まれている。飢え死ぬ人々をよそに、エヴァは戦いを続ける。

使徒の殆どは、ネルフ中枢を執拗にねらう。使徒とはなにか。ネルフはなぜ使徒の目標となるのか。

やがてネルフの使命は、「サードインパクト」を未然にふせぐことだ、と説明される。ネルフの地中深くには第一使徒アダムが眠り、他の使徒との接触は大規模災厄「サードインパクト」を引き起こし、人類は滅亡する、というのだ。使徒と戦えるのは、エヴァだけだ。エヴァを操縦できるのは、マルドゥック機関が選出した少年少女だ。彼らはいずれも、セカンドインパクトの歳に生まれ、母がいない。操縦者はエントリープラグ内に入り、プラグはエヴァの脊髄に挿入される。エントリープラグに充たされた漿液に似たL・C・Lを介して、操縦者とエヴァは人間の感情をつかさどるA10神経を接続して「シンクロ」する。シンクロ率がエヴァの操作性を左右する。母の胎内に似たエントリープラグにはいって、エヴァを操る母のない

子供たち。

ネルフの置かれた第三新東京市は、遷都計画をダミーとし、来るべき使徒来襲に備えて建造されていた使徒迎撃要塞都市である。人の出入りは極端に制限され、居住者はネルフの関係者だけだ。ネルフがおかれているのは、箱根地下のジオフロント内だ。地中深く巨大な球形を成すこのジオフロントは、冬月コウゾウによれば、「われわれ以外のもの」によって作られた空間である。使徒来襲の事実、すべて巧妙に隠蔽される。

『新世紀エヴァンゲリオン』の物語世界では歴史は奇妙な展開をしている。エヴァを生産する「E計画」、「この絶望的状况における人類の最後の希望」と人類補完委員会の黒幕である秘密結社ゼーレがいうところの「人類補完計画」の中枢は、国連の特務機関ネルフだ。人間以前に存在した知的生命体によってジオフロントは作られた。セカンドインパクトによって半数の人類が死に絶えた後、ジオフロントに「人類の新たな歴史をつくる」アダム再生のための「E計画」を推進するゲヒルン（国連直轄の人工進化研究所）が置かれた。所長はシンジの父ゲンドウ。E計画の実質的責任者は母ユイ。最初のアダム再生計画は、エヴァの起動実験時に起きたユイの死によって頓挫する。二〇〇四年、三才のシンジの目の前でユイは笑いながら消えた。ユイがエヴァからサルベージされることはなかった。ユイを失ったゲンドウは、一週間の失踪後、新たに「人類補完計画」

と「アダム計画」に着手する。南極の光の巨人第一使徒アダムに似せてエヴァを作るのが「E計画」であり、オリジナルのアダム再生が「アダム計画」である。二〇一〇年、赤木ナオコが三台のスーパーコンピュータによるシステム「マギ」を完成された翌日、ゲヒルンはネルフと改称される。しかしナオコは、前夜幼い綾波レイを絞殺、自らも投身自殺していた。ナオコはレイにユイの面影を見て動転したのだった。やがて「マギ」の管理は娘のリツコに委ねられる。リツコの大学での友人だった葛城ミサト、加持リョウジもまた、ネルフにはいなかった。ミサト、リツコ、加持は、三人のチルドレンを指揮し、監督する立場になる。「人類補完計画」の真相があきらかにならぬままに、物語は進む。

相次ぐ使徒の来襲を、三機のエヴァと三人の十四歳の子供が防ぐ。バックアップするのは、ネルフ司令部の大人たちとスーパーコンピュータシステム「マギ」。作戦部長である葛城ミサトは、セカンドインパクト時に南極からただ一人生還した。零号機には感情の乏しい少女綾波レイ [Fig. 3]。初号機には碇シンジ。式号機にはドイツからやってきた天才少女惣流・アスカ・ラングレー [Fig. 4]。エヴァンゲリオンの操縦者は、一人ずつなのだが、それぞれ「チルドレン」と呼ばれる。ミサトとシンジ、アスカは共同生活をしている。レイは町外れの廃墟のようなアパートにただ一人暮らす。シンジとゲンドウは実の父子だが、日常的な接触はユイの死後ほとんど

ない。レイはつねにゲンドウのそばで極秘の任務を行っており、他人には冷酷にみえるゲンドウはレイに強い感情を寄せている。

ネルフは零号機と初号機のパイロットを交換、起動実験を行う。このとき、シンジは、零号機の中にあるものを感じ、零号機は暴走する。実験をうけてネルフは「ダミーシステム」を開発、レイのパーソナルを移植したダミーをエントリープラグに載せ、チルドレンの代わりにエヴァを起動できるようにする。一方でレイは南極から運んだ使徒成長抑制因子の「ロンギヌスの槍」を再生された地下のアダムに突き刺す。

使徒は一つとして同じ形を持たず、使徒間の連絡はないが、共通するのはその活動エネルギーを供給する光球（S2機関）と強固なバリアA・T・フィールドである。使徒は九九・八九%まで、遺伝子とその配列が人間と同じである。エヴァが唯一使徒に対抗できる由縁は、エヴァもまたA・T・フィールドを持つからだだったが、活動時間は電源によって規定されていた。ネルフは、無限の活動を約束するS2機関のサンプルを使徒から得、ひそかに建造されている量産型エヴァンゲリオン（エヴァシリーズ）に登載する。あらゆる攻撃をはねかえすA・T・フィールドにはある秘密があった。

徐々に使徒は、人間に関心を持ちだしたようだ。慢心したシンジは、第十二使徒レリエルに取り込まれ、内なる自己との対決を迫られ、死に瀕する。そのとき、シンジは母の幻を見た。薄れ行く意識

のなかで、突然初号機は暴走、シンジを救った。第十三使徒バルディエルは参号機に寄生し、凶暴な力で零号機、式号機を大破、エントリープラグ内に同じ十四歳の子供が載っていることを知っているシンジは戦闘を許さず。ゲンドウは、シンジからの接続を切断、ダミーシステムを使う。シンジが載ったまま初号機は虐殺ともいべき破壊をおこなう。初号機がエントリープラグを握りつぶそう「[Fig. 5]」としたとき、シンジは絶叫し、なぜか初号機は活動を停止する。エントリープラグから救出されたのは、シンジの親友だった。シンジは、エヴァを降りる決心をするが、続いて襲った第十四使徒ゼルエルに片腕を失っている零号機でレイが捨て身の攻撃を仕掛け、むなしく倒れたとき、再び初号機に乗り込む。このとき、シンジは四〇〇%という驚異的なシンクロ率をあげ、エヴァは使徒を摂食してS2機関を取り入れ、覚醒し、装甲板を装った拘束具をはずして、自らを解放する。シンジはそのままエヴァに取り込まれてしまう。ユイに行ったのと同じサルベージが再び失敗しかけたとき、ミサトは号泣。シンジは自分が生まれる前に両親が交わした会話を耳にし、L・C・Lから実体を取り戻す。そのときゲンドウは「女だったらレイと名づける」といっていた。後に明らかになるのだが、L・C・Lはかつて地球に生命を産んだ「生命のスープ」そのものだ。

覚醒と解放の後、停止した初号機は凍結される。ゲンドウがシナ

リオを改変しようとしているのではと、不審を抱いたゼーレは、副指令冬月を拘束するが、加持が救出、そのため彼は殺される。加持は死ぬ前に、ミサトにシナリオの真相を明らかにするICチップを渡していた。

二〇〇〇年のセカンドインパクト、二〇一五年の使徒来襲は、ゼーレの「死海文書」に記されていた。セカンドインパクトは、他の使徒覚醒以前に第一使徒アダムの卵を還元しようとして、ゼーレとゲンドウたちが起こしたものだ。ゲヒルン・ネルフは、「死海文書」のシナリオを実現するための組織であり、「E計画」「アダム計画」「人類補完計画」は、それを推進するためのものだったのである。そのためには、第十七までの使徒を殲滅し、拾参号機までのエヴァを量産することが必要だった。

第十五使徒アラエルは、出撃した式号機パイロットアスカを精神汚染し、彼女の心を探ろうとする。アスカは、エヴァとの接触実験によって、正気を失い、縊死した母とそれ以後の辛い生活を思い出し、半狂乱となる。ゲンドウは初号機の凍結を解除せず、地下のアダムに刺していた「ロンギヌスの槍」を用いて使徒を殲滅するようレイに命ずる。ロンギヌスの槍を抜かれた「アダム」は全身を成長させ、使徒は殲滅、槍は宇宙空間を漂い、回収は不可能となった。これこそがゲンドウの望みだった。レイを嫌うアスカは、レイに助けられたことでいよいよ自信を失う。

DNAの螺旋に似た第十六使徒アルミスエルが出現、零号機とレイに直接侵入して行く。使徒はレイと同じ姿をとり、レイに融合を迫る。アスカは遂にエヴァを起動できなくなり、ゲンドウは初号機に出撃を命じる。使徒がレイの心をなぞって、シンジに向かうのを見たレイは、シンジを救うために自爆、使徒と第三新東京市共々消滅する。回収されたエントリープラグには黒こげになったレイの死体があった。リッコはこれを極秘とする。翌日、シンジとミスアトは、レイが助かったことを知り驚くが、それは三人目のレイだった。加持の死を受けとめたミスアトは、ネルフの秘密を明らかにするようリッコを脅す。シンジを呼び寄せていたリッコは、ミスアトとシンジに、レイがユイの体のクローンであることを示す。しかし、レイの魂はユイのものではなかった。レイに対する嫉妬に駆られたて、リッコはクローンをすべて破壊する。ゲンドウはナオコ、リッコ親子を肉体で操っていた。

リッコは拘束される。アスカは失踪、正気を失っている状態で保護される。そこへ五人目のチルドレン渚カヲルが人類補完委員会から直接送り込まれる。シンジは生まれて初めて素直に心を開ける相手をつつけた。しかし、彼は人間の形をした第十七使徒だった。地下のアダムに接触しようとしたカヲルを、シンジは追撃する。あとにレイも続く。レイもまた使徒だった。カヲルは「アダム」が実はアダムの最初の妻「リリス」であることを見抜き、シンジに初号機

による扼殺を願う。カヲルは自らとエヴァとを「アダムより生まれしもの」といい、人類をアダムとリリスのあいだに生まれた「リリン」と呼んでいた。彼は「A・T・フィールドは誰もが持つ心の壁」という言葉を残す。

死海文書に記された第十七までの使徒すべてを殲滅したあと、ネルフに閉鎖命令が下る。使徒なきあと、強力な破壊兵器になりかねないエヴァはどうなるのか。いぶかるネルフに戦略自衛隊が襲いかかる。一方で、ゼーレはマギをハッキングして、ネルフの無血制圧を試みる。人間の敵は人間だった。ゲンドウはリッコを釈放し、マギのリプログラムを命じる。人類補完計画の真相を知った日本政府は、ネルフへの保護を破棄する。人類補完計画とは、できそこない群体として行き詰まっている人類を完全な単体生物として人工進化させる計画だったのだ。そのための依代がアダムの妻たるリリスあるいはアダムから生まれし初号機だった。戦略自衛隊はネルフ本部で殺戮を繰り返す。正気を失ったアスカと式号機は地底の人工湖に隠されていた。式号機に爆撃がはじめられたとき、突然、母の魂が式号機に宿っているのに気づき、アスカは覚醒した。戦略自衛隊をほぼ壊滅したアスカにゼーレがもたらしたのは、伍号機から拾参号機までの量産型エヴァだった。量産型エヴァは、飛行能力を持ち、カヲルのダミープラグとS2機関を登載、無限に活動する残酷な殺戮マシンだった。一度は勝利を収めたようにみえたアスカだったが、

破壊された量産型エヴァはほどなく再生、式号機とアスカを陵辱する。彼らは手に手に複製のロンギヌスの槍を持ち、式号機の生体機能を完全に停止させてしまった。アスカは狂気のうちに死を迎える。

カヲルを殺した罪の意識で、シンジは自己崩壊していた。戦略自衛隊に無抵抗で殺された彼を救ったのは、ミサトだった。力無くうなだれるシンジを初号機のケージ近くまで連れていったミサトは、シンジをかばって被弾し、彼をエレベータに乗せ、斃れた。拘束された初号機に「かあさん！」とシンジが叫んだとき、初号機は起動、シンジを載せて外に向かう。しかし、それはゼーレの思う壺だった。

シンジと初号機は陵辱された式号機に激昂、結果として月からロンギヌスの槍を呼び寄せる。槍は、ゼーレの人類補完計画を開始する契機であった。量産型エヴァが放つ複製の槍が、初号機の掌を貫き、聖痕があらわれた。儀式は始まる。十機のエヴァは天上に巨大なセフィロトの樹「E.T.S.」を描いた。中央にはシンジの載った初号機が、依代として置かれる。知恵の実を選んだ人類であるヒトと、生命の実を手にした使徒とよばれるヒトとを融合し、知恵と永遠の生命とを合わせ持つ完全な単体を誕生させるのが、人類補完計画の目的だった。初号機は天に羽根を広げ、梢と根とを逆さまにした生命の木へと姿を変えた。

ゲンドウは、破壊されたレイたちの培養槽にレイを見つけ、彼の

シナリオを実行すべく地下へ向かった。しかし、そこにはリッコが銃を構えて待っていた。ゲンドウはリッコを撃つ。斃れたリッコには眼もくれず、ゲンドウはレイによって、アダムとリリスの融合を果たそうとする。しかし、レイはゲンドウを拒み、シンジの所へ行くとために一人リリスに融合する。レイはユイのクローンの体とリリスの魂をもっていたのである。ユイの復活を願ったゲンドウは置き去りにされる。リリスは生命の源であり、使徒はみなここから生まれたのだった。使徒とは、ヒトと同等の可能性を持った別な形の人類であった。ヒトもまた、ゼーレの死海文書によれば、第十八番目の使徒であり、シナリオ上滅ばさねばならない存在であった。つまり、最後にサードインパクトを引き起こすことが、人類補完計画だったのである。

レイと融合したリリスは地上へと向かう。それとともに黒い月があらわれた。黒い月はジオフロントそのものであり、生命の源であるリリスの卵であった。

リリスはレイの姿をとり、ユイの魂を宿しアダムよりうまれた体を持つエヴァ初号機と融合する。人類補完計画は発動した。ガフの扉が開き、終末と始まりが同時に進行する。アンチA・T・フィールドが地上に満ちる。心の壁を取り除き、自我境界を失わせ、すべての人類をL・C・L、生命のスープへと溶解し、一つにするために。人類は個々の区別を失い、大きな生命の海となって地上に溢れ

た。

このまま完全な単体でいるのか、不完全な個にかえるのか。それを決めるのは、依代となったシンジの心だった。シンジは、初号機に母の声を聞く。ユイは、自分の体と引き替えに、永遠の生命をもつエヴァに留まることで、人類の存亡を見、さらには世界の終わりまでも生き続けることを願った。シンジは母に別れを告げ、再び個として生きることを望む。それが、自分を認めない他人が存在する居心地の悪い世界だとしても。

三 戯画として引用されるキリスト教と Material Children

『新世紀エヴァンゲリオン』の結末は、ある種居心地の悪いものを感じさせる。それは、「神」の役割を与えられたシンジが、結局「神」の責任を果たせないからだ。

「神」にひとしい存在となったシンジは、大きな運命を引き受けようとはこれっぽちも考えていない。彼が依存しているのは、アスカである。アスカにののしられ、はねつけられることで、シンジは自分の存在を見つけている。情けなく、弱々しい「神」が、人類の依代となったシンジの姿なのである。使徒と戦う、従来の文脈でいうならば「人類の英雄」であるはずのシンジが、エヴァンゲリオンに載ることのみ自分の存在理由をみつけていたのと同じように、

エヴァンゲリオンの卓越した力をシンジは自分とは切り離して考えている。エヴァンゲリオンの力を自分には投影できないのだ。力をふるうことに、なんの意味も見つけられないのだ。何回もの戦闘で幾多の犠牲者がでていくはずだが、シンジはそのことには無関心である。彼がエヴァンゲリオンの力を考えるのは、自分の友人に危害が及ぶときだけである。シンジにも、アスカにも、もちろんレイにも、直接自分にかかわる人間以外への想像力はない。「神」となったシンジもやはり、自分のことしか考えられない。

幕切れの直前、個となることを選んだシンジの隣には、包帯と眼帯をし、黒髪（あるいは暗いせいかもしれない）となったアスカが横たわっている。包帯と眼帯は綾波レイの象徴であり、黒髪はシンジのために命を捨てたミサトをおもわせる。母のクローンと誘惑する姉をその身に負ったアスカに、シンジは馬乗りになり、首をしめる。幕切れのせりふは、アスカの口から漏れるシンジへの拒絶と憎悪の言葉。「気持ち悪い」。かくして、終末と始まりの物語は、ラブコメディめいた擬装をほどこして、カタルシスなき結末を迎える。

『新世紀エヴァンゲリオン』は、終末と始まりを説明するために、キリスト教的世界から正統なるものも異端なるものも区別なく物語の世界に取り込み、背景としている。しかし、明らかなのは、キリスト教に対する憎悪にも似た冷たい引用態度である。庵野秀明監督は、欧米人が「忍者」「侍」「芸者」「空手」等を日本文化に関する

おざりな引用とするのと同じやり方で、キリスト教的世界を引用している。キリスト教という宗教への配慮を欠くはもちろんのこと、許しがたい対立者として排撃する怒りがあるのでも、揶揄がこめられているのでもない。ただ「そこにある」ものとして、生け花の素材にでもするかのように、キリスト教的なフレーバーを作品に援用してみたに過ぎない。その意味で、庵野監督の態度は不信心や瀆神よりもさらに冷たい。二十五話二十六話を作りなおすと決めた時点で、庵野監督はかなりの方向修正を行ったように見える。キリスト教的世界からの引用に粉飾された結末をあっさりと迎えるのではなく、個と個のコミュニケーションの問題に引き戻そうとしたようだが、しかし、それは座りのわるいものとなった。作り手の個が個ではなかったからだろう。

個の居心地の悪さは、庵野監督自身の「自分を知りたい^②」という言葉に端的にあらわれている。それは他者を参照するのではなく、自己言及に向かう。外ではなくて、中へ。その個といえ、一人であっているのではなく、なにかに依存している始末の負えなさである。庵野監督との対談で「自分があやふやで規範がないから、自分に言及する^③」という竹熊健太郎の言葉は、『エヴァンゲリオン』がカタルシスをもたらさなかった理由を暗示している。唯一無二の存在を抱える孤独と重責には、あやふやな個は耐えられないだろう。

個があやふやである、ということとは、「われわれにはオリジナル

をつくれぬ」と発言する庵野監督の思いと重なる。庵野監督はいう。

「テレビ万能時代に生きたものの宿命ですね。もっと認識すべきだとおもうんですよ。僕らには何も無いってことを。世代的にすっぱり抜けてる。テレビしかないんですよ。……テレビ番組が僕らの社交場であったし、テレビ以外ではマンガですね。……共通言語となる媒体がテレビとマンガしかなかった。」^④

テレビとマンガ、端的にはアニメと少年少女マンガは、ある年齢になれば卒業するもの、子供のものとみなされていたのだが、六〇年代には、大学生がマンガを読むようになり、区切りがなくなった。それでも、大人がアニメに熱狂することはなかった。その壁をなしくずしにしたのは、六〇年以降に生まれた世代である。特撮全盛の六〇年代後半から七〇年代にかけて、一部の子供たちは怪獣番組を卒業することなく、中学生になった。そして、七四年、『宇宙戦艦ヤマト』の本放送が始まる。六〇年生まれがちょうど十三歳か十四になったときだった。

『新世紀エヴァンゲリオン』が、最終的に落ちつくはずの終結をむかえられなかったのは、作り手が、物語世界の超越者として振舞うことを放棄したからである。主人公シンジは大人に向かって成

長出来ないままだ。シンジは自己言及の泥沼に陥っているように見える。彼を救いとする存在はいないのだ。

もちろん、ここには、『宇宙戦艦ヤマト』のように、人類への愛のために、地球を救う使命を果たす、といった大義名分、庵野監督が巨神兵の作画に参加していた劇場版『風の谷のナウシカ』の自己犠牲といった、庵野監督から見れば大人にあたる先人たちの回答をなぞりたくはない、という思いがあったのはまちがいない。シラケ世代とよばれ、いかにも「感動をよぶ」仕掛けに対しては、「シーツ」という音で拒絶を示した中学高校時代、つねに渦に巻き込まれることを恐れ、傍観者でいることに慣れたいまの三十代半ばに共通の、「大きな物語」に対する冷やかな態度がある。八九年のソ連、東欧崩壊、中国民主化運動弾圧をわりあい平静にみていたのも、それまで大人たちが仕掛けてきた「大きな物語」が、嘘に満ちているのを経験してきた子供のころからの習い、期待に裏切られる前にとりさげるといふ、自己保存のみみっちいやり口が身に付いていたからである。

十四歳の少年の成長を描けないのは、社会的には大人であるはずの庵野監督自身自ら認めるように、本人が精神的には十四歳のまま今に至っているからだろう。大人ではなく、かといって無垢な子供でもない十四歳。そして、この十四歳で成長をとめたという思いは、私も含めたいまの三十代には少くない。

その要因は、テレビにある。

庵野監督は六〇年生まれだ。生まれたときからテレビがあった最初の世代だ。直接的な経験でなく、テレビ画面を通してさまざまな視覚的経験ができるようになったことは、自己と経験との著しい乖離を生んだ。離人体験は日常のものとなる。読書や、映画、ラジオ放送などでも、疑似的経験は可能だ。しかし、家庭でいながら、一方的に流れてくる視覚情報を受け取るテレビは非常に魅力的だった。テレビ依存が起きたのだ。

視覚情報への依存は、デバイスが変わるたびに、一番若い世代を飲み込んでいく。大人が経済的な利益をもとめて作り出す新しいデバイスは、もっとも若い世代に取り返しのつかない影響を与える。そして、それが検証されるころには、つぎのデバイスに依存して育った世代が、別の現象をおこしているのだ。

生まれたときからテレビのある世代の次は、生まれたころからカラーテレビがあった。彼らは、モノクロ放送をカラー画面に無意識の中で変換することなく、自分の見ている世界とさほどかわらない情景をテレビから受け取った。テレビから受ける視覚情報と現実との境目はみえなくなった。これが、七〇年代前半だ。このころになると、一家に複数のテレビが存在するようになり、やがて、一人一台以上のテレビを持つようになる。テレビは、一家団欒の場から、個室へと移っていく。その次は、生まれたときからテレビゲームと

ビデオデッキがあった世代となる。七〇年代末期から八〇年代のことだ。コントローラーは、ゲームの中のキャラクターを操作する道具であるだけでなく、ゲームに没入する人間には身体の一部のように感じられる。リアルタイムでは一回限りの存在だったテレビ番組や映画は、録画を通して、なんでも好きなだけ好きな速さで繰り返せるようになった。ゲームは、いまここにいる自分以外の力のある別な存在をヴァーチャルリアリティのなかに生み出し、ビデオは、時間は一回限りのものではなく、何度でももとに戻せるという錯覚を生む。現実の自分とは異なった自分がゲーム内に存在する。もし、ゲームの結果が気に入らなければ、リセットすればいい。何度でもやり直せる。ゲームもビデオデッキも、経験の一回性を希薄にした。かけがえない経験に対する感度は鈍った。八五年以降は、家庭用ビデオで子供を撮影することが爆発的に流行し、いまではごく当たり前の風景となっている。赤ん坊の内から、肉親の顔ではなく、ビデオカメラにさらされてきた世代は、カメラレンズに対し免疫がある。カメラレンズに見られることからうける、居心地の悪さ、気持ち悪さを感じないのである。カメラに対して、どう見せたらいいかを知っている。ここで、視覚情報に依存するばかりではなく、外部の視線にどう自分を見せるかを生まれたときから学習してきた人間があらわれる。九〇年代は、さしずめ生まれたときからコンピュータのあった世代となるだろう。いい大人たちがネットサーフィンに

はまってしまっている現在を見るにつけ、サイバースペースで自我形成をしている子供たちの未来はいかなるものかと思うが、結果はまだわからない。

このようにして、六〇年代以降の子供たちは、それぞれ一番新しい視覚的デバイスにさらされ、依存しながら育ってきた。視覚的デバイスが子供を飲み込む危険は、そのときどきに叫ばれ、「テレビに子守をさせるな」「テレビゲームの時間を制限しろ」などなどといわれているのだが、よほど教育熱心な手の回る家庭でもない限り、視覚的デバイスから子供を取り戻すことはなかったし、なにより、親たちは子供を視覚的デバイスに預けて、自分の時間を持とうとした。親は人として子供に対する時間を増やすよりは、電子子守に預けて、やっかい払いをする方を選んだ。すでに、核家族化がすすんでいたことが、拍車を掛けた。親たちは、自分たちの老親との同居をできるだけ避けるようになっていた。家には子供しかいない。増えた時間は、収入を手にしたたり、娯楽にあてるのに使われ、個人としての親が個人としての子供を育てる時間はないがしろにされていた。核家族では、子供と親の間に逃げ場がない。そして、家族外のものが子供に干渉されるのは拒絶され勝ちである。子供が大人の行動を見て育つ、という大事な過程は、大人が自分の時間を視覚的デバイスと取引することで子供の目を奪い、二度とない機会をみすみすのがした。放置は自由と言い換えられた。家庭教育が荒廃してい

るとすれば、それは、子供を育てる責任を自ら負わなかった親であり、その親から育った放置された子供は、同じことを繰り返すか、自分の惨めさを取り戻そうとして極端な欲望のおしつけをする親になる。

どちらにしても、子供にはやりきれない成長過程が待っている。

さらにやりきれないのは、このような家庭が、「ごく普通の家庭」であることだ。そして、「ごく普通の家庭」の雛形は、「ホーム」にある。

現天皇が、戦後アメリカ女性の教育を受け、「自分にはホームがなかった」と気づいた、と発言した話は有名である。戦後「マイホーム」は、日本の家庭の代名詞になった。

「マイホーム」の典型のひとつは、日本では五八年に放映されたアメリカドラマ『パパはなんでも知ってる』にみられる、とよく言われる。子供を理解し、子供のために努力を惜しまない良きパパ。不愛想で、ろくに口を利かない、家父長としての日本の父とは大きな隔たりがある。彼我の差には、もちろん、伝統の違い、社会の違いなどさまざまな要因があるだろう。決定的に異なるのは、「ホーム」のバックボーンとなっているのが、キリスト教的家族像だという点である。良き家庭と良き信仰とは不即不離である。

銃をもちいた抗争に明け暮れるアメリカのストリートギャングの少年が、テレビのインタビューに答えて「それでも子供やおさない

子供を連れてくる母親に銃弾があたるのはいやだよ」と発言すると、たいていの日本人はその落差に驚かされるが、これも日常にいかにかキリスト教的な観念が浸透しているかを示す一端だ。よきものを慈しむ、というのが、たとえテレビ向けのポーズであったにしてもだ。日本のチーマーにこうした観点はない。

戦後「ホーム」は輸入されたかも知れないが、それを支える精神的背景であるキリスト教的家族像を真剣に問われることはなかった。日本に齎らされたのは、いわば、キリスト教的家族像の戯画的な引用といっていだろう。

「ホーム」にまつわる戯画的なキリスト教の引用は、家庭行事にもみられる。信仰なきクリスマスは、その最たるものだろう。家族そろって、クリスマスケーキを食べ、子供にはプレゼントを贈るという形で定着した戦後のクリスマスは、日本の「ホーム」を象徴する。無垢な子供、暖かい団欒、直会めいた会食。いずれもが、明らかな嘘を含みながらも、定型的に執り行われることが、信仰なきクリスマスとの約束であり、「ホーム」のきまりなのである。

子供が無垢である、という思いこみ、自分の子供はかわいい、というエゴとが、暴力的な「マイホーム」を生み出した。近隣とのつながりが薄れた現在、子供によりかかって、公德心のないふるまいにおよぶ家族は、よく目にされる。日本の「ホーム」は、超越的なよきものに裏打ちされた形で両親が主導するのではなく、無垢と仮

定された子供を中心に据える、中空の精神構造になっている。

この魂なき「ホーム」と視覚的デバイスの子供の取り込みとが手を結んで、戦後が進んできたのだ。日本では、「ホーム」のバックボーンである「神」となるべき座をしめていたのは、テレビといってもいいだろう。みなが準拠し、規範となるのは、テレビから垂れ流される視覚的情報なのである。いまや、どんな山村にもテレビ電波は届くようになり、テレビの流す標準語が方言を変化させている。地方の一主婦が「テレビが言ってたから」と、それまでの調理のやり方を一変させることもある。

「神」であると同時になんの責任ももたないテレビに、「ホーム」は左右される。

平均寿命が延び、抗生物質や輸液の発達でお年寄りが死になくなったことも、六〇年代以降の世代には深刻な影を落としている。

昭和天皇の在位が六十四年の永きにわたり、皇太孫が成人の儀をむかえる長壽の時代、家族間の世代交代は進まなくなった。孫が大きくなっても、祖父母が元気で、家族の構成員が二十年以上変わらないことも珍しくない。しわ寄せはもっと幼いものに及ぶ。毎日が再放送、上の世代の物語を延々見せられ続けているのだ。目に見えない閉塞感はこうしたところからも生まれている。

そして、神聖な「ホーム」は、決して実体を外にあきらかにはしない。傍目には幸せそうな「ホーム」を演じることが家族の役割に

なる。キリスト教精神をうけつぐことは不可能だった日本の「ホーム」では、ただ形式をなぞり、規定された役割をはたすことが、「家族の幸せ」を導く、とされるのだ。ここでも、規範はテレビがもたらす情報なのだ。『エヴァンゲリオン』の子供たちが、その存在そのものによってではなく、エヴァンゲリオンのパイロットという役割に自分の存在価値を認めなければならないように、子供は、「子供」という規範を充たすという役割によってのみ、愛されていることを、敏感に感じとっている。子供は Material としての Children なのだ。それは、テレビに預けられ、世間的には普通の家庭に見えながら、内実は子供をその存在によって愛さない肉親に育てられた、六〇年代以降生まれの呪詛につながるのだ。かつての子供は、取り返すことの出来ない家庭生活での飢餓感、喪失感を心深く抱いている。そして、いまの子供たちはそれに直面している。『新世紀エヴァンゲリオン』にひきよせられたのは、こうした心の傷、取り返しのつかない時間を少しでも取り戻したい人々だったといえるだろう。

レディメイドな「ホーム」のレディメイドな幸せ。規範破りには「世間」からの圧力が及ぶ。実体なき「ホーム」の抑圧に欺瞞を感じとっていたからこそ、家族とは辛い少年時代を過ごしたという庵野監督は、その「ホーム」の本来のバックボーンがキリスト教であることを嗅ぎとり、冷たい憎悪をこめて戯画的に引用し、大人にな

れない大人が大人になれない大人と大人になるのを恐れる子供のために『新世紀エヴァンゲリオン』を完結させたのだ。欧米的な価値観を表層的にしか取り入れずにきた日本の、窒息しそうな現在を、Material Childrenとしてしか生きられない子供の（あるいは大人にならない大人の）姿を通して、戯画的にキリスト教を引用することでささやかな復讐を企てたのが、戦後五〇年目に日本人が得たキリスト教への一つの答だったのである。

注

- (1) 大泉実成「要するにファンにしがみつかれてるっていう感じですか」。庵野秀明「そうですね。教祖にされるのはイヤだっただけです。このままだとこの番組はドグマになってしまふ。……:どんどん作品が一人歩きして……:それが大きくなりすぎて、もう僕の責任の範疇を越えていくような感じだった。」(一九九六年六月十九日)『庵野秀明 スキゾエヴァンゲリオン』太田出版、一九九七年三月、十八頁。
- (2) (3) 同1〇三頁。
- (4) 同十九―二〇頁。

参考資料

- 『新世紀エヴァンゲリオン NEON GENESIS EVANGELION』全二十六話
テレビ東京系 一九九五年十月四日～一九九六年三月二十七日。
LD版 『新世紀エヴァンゲリオン NEON GENESIS EVANGELION』
1～10キングレコード 一九九五年～一九九七年。

『新世紀エヴァンゲリオン 劇場版 シト再生 DEATH AND REBIRTH』
EVA制作委員会 一九九七年三月。
同映画パンフレット。

『新世紀エヴァンゲリオン 劇場版 Air/まごころを君に THE END OF EVANGELION』EVA制作委員会 一九九七年七月。

同映画パンフレット。

『新世紀エヴァンゲリオン フィルムブック』1～9、劇場版 [DEATH

編] 角川書店 一九九五年十二月～一九九七年七月。

コミック版『新世紀エヴァンゲリオン』1～3 貞本義行 角川書店。

『庵野秀明 パラノエヴァンゲリオン』太田出版 一九九七年三月。

『EVANGELION ORIGINAL』I～III 庵野秀明他(テレビ版のオリジナル

ルシナリオ) 富士見書房 一九九六年七月～十一月。

『NEON GENESIS EVANGELION エヴァとの一七六日』軍事史通信

HARUNA。

日経MIXのanimation, room. eva. try会議などの書き込み。

(一九九七年十月稿)

その後、LD版は完結したが、ここには言及していない。

使用図版: 『新世紀エヴァンゲリオンコレクターズディスク1～5』

(発売・榎ガйнаックス)より



Fig. 1 南蛮にあらわれた光の巨人。第一使徒アダム



Fig. 2 主人公碇シンジ『新世紀エヴァンゲリオン』は彼の成長の物語である

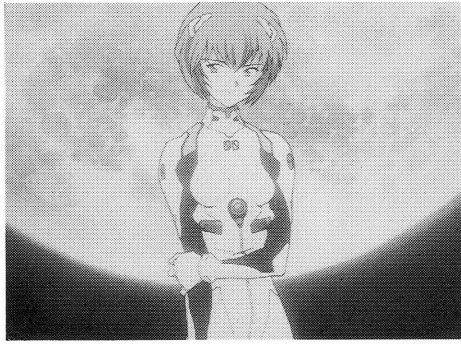


Fig. 3 ファースト・チルドレン綾波レイ
生年月日、過去の経歴はすべて抹消済み。『エヴァンゲリオン』では、月と水のイメージで表される

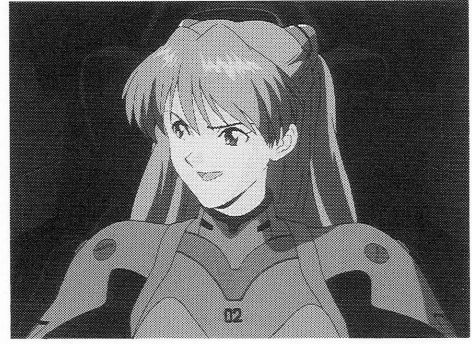


Fig. 4 セカンド・チルドレン惣流・アスカ・ラングレー 勝ち気な天才少女は、やがて精神のバランスを失う

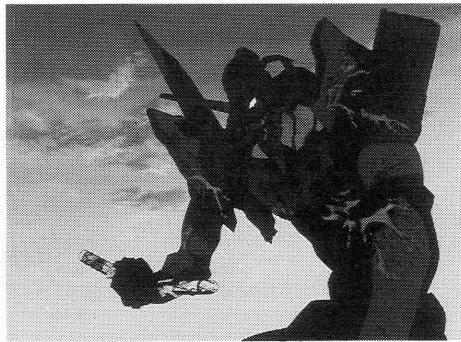


Fig. 5 ダミーシステムに操られ、参号機パイロットのエントリープラグを握りつぶそうとする初号機 参号機はすでに惨殺されたあと

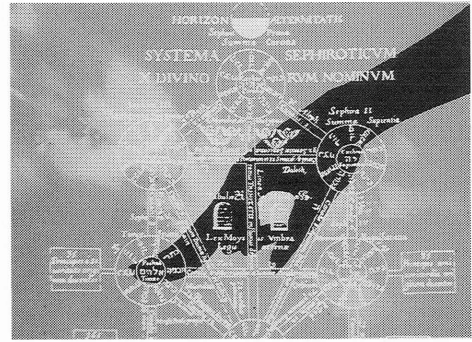


Fig. 6 セフィロトの木 エヴァシリーズ生産の真の目的は、人類補完計画の遂行だった